

11 不滅の恋人

ある日の昼下がりに 私は
何マイルも何マイルも牧草地を横切り
亡くなった恋人が最後に笑顔を見せた場所まで
巡礼の旅に出かけた

悲しみに暮れながら 5
熱^{ほて}った芝地の上に身を横たえた
ちょうど私の身体を
恋人が歩いた地面の上に押し付けている感じがした

私は 横になったまま物思いに沈んだ
夢現^{ゆめうつ}つの中で恋人が現れて そばに立った 10 い
つもあの目に宿していた
あのキラキラした輝きで

「あなたに引き寄せられて やってきたの
誠実なあなたのもとに」
心ときめかせる声 15
結婚する前にいつも聞かせてくれていたあの声

「わたしが死んで七年の時が巡ったわ
わたしを覚えている者はもう誰もいない
夫は別の花嫁を抱き
子供たちの愛も もうその女のもの 20

兄弟姉妹も友人たちも
もう わたしの亡霊に会いに来てはくれない
誰がわたしを一番大切に思ってくれていたのか
みんなの前から姿を消して初めて わかったわ」

私は言った「もうこの世にいても 毎日が寂しいばかり 25
あなたの笑顔無くしては いっときも生きてゆけない
今夜のうちに銃弾^{たま}か 剣^{つるぎ}で決着をつけて
夜明け前にはあなたのところに参ります」

恋人は柔らかい唇を震わせて
思い留ませようと 口を開いた 30
「ああ 友よ それはだめ
わたしはもう 面影^{かげ}でしかないの

もはや面影^{かげ}でも 心に留めてくださる方の中では
不滅なのです
あなたが生きるとは わたしを生かすこと 35

あなたが死ぬことは わたしを殺すこと

あなたの中をこそ わたしの唯一の拠り所として
この世で幸せに生きる力が続くのです
あなたを信頼して
これからも長い年月を過ごせるのです」

40

余りにも予期せぬ告白

恋人の置かれた苦境に 私は全身が震えた
このところの厭世気分を振り払い
寒々とした不安な生にしがみついた

「唯一無二の恋人よ 私はもう死なない
あなたの不滅の日々を延ばすために
前途に立ちはだかる
どんなに小さな危機からも身を守ってゆく」

45

恋人は笑みを浮かべて 消えていった

以来 誕生日の月が昇る時
あるいは 新しい季節が始まる時
あるいは 様々な記念日に 恋人はたびたび現われる

50

しかし 私の悲しみは深まるばかり

私が死んだら 自分を通してのみ生きている恋人の
その御^{みたま}霊に与えられた生存期限も終了し
二度と再び甦^{よみがえ}ることはないのだから

55

1898

(山中光義訳)